

お知らせとご協力をお願い

ピアノパラリンピック提唱者 迫田時雄

これは「障害が有ってもピアノは弾ける・・・私たちはみなさんのお手伝いをしましょう。」と呼びかけ、それにこたえて一緒に学んでいるピアノ学習者へのお知らせです。

その後皆さんのピアノ学習の進捗状況はいかがですか？

勿論それぞれの環境によって条件は違いますが、大切なことは毎日コツコツと続けることです。

私は現在この15年来取り組んできた「ピアノパラリンピック運動」の本格的定着を目指してあらゆる手を尽くしています。

既に2005年横浜で開催した、第1回「ピアノパラリンピック」。

第2回は2009年「バンクーバー大会」、第3回は2013年11月ウイーン大会でした。

このときはなんと世界19か国からの参加があり、またテーマの「ベートーベンの喜びの歌」では見事な演奏が披露され、みんなの真剣さをひしひしと感ずるものでした。

その後 日本の皆様にご報告の為、昨年2月に開催しました「ウイーン大会メダリストコンサート」では世界のトップクラスの仲間が集まり、見事な演奏を披露にみんな驚きました。

とくに光栄なことにこのコンサートには畏れ多くも皇后陛下もお見えになるということで、スタッフ一同大変緊張しました。しかし、残念ながら当日は40年来の大雪による交通マヒの為に実現できませんでした。しかし皇后様から侍従長を通して、私どもの取り組みに大いに関心をお寄せいただいていることのお言葉を頂き、誠に名誉なことと感動いたしました。このことはぜひ皆様にお伝えしたいことです。

さて、2020年いよいよ東京オリンピック・パラリンピック開催が決定しました。

当初から申し上げているように、私はこのピアノパラリンピック運動をこの歴史的なイベントである「オリンピック」のステージに乗せたい。皆さんがこの最高の舞台上で演奏しているところを見たい。というのが私の夢でした。

まさに機会到来です。

幸い東京都知事・舛添様の話では「先のロンドン大会を超える最高の大会」を目指す。それには「文化も含める・・・」とっておられます。

もともとオリンピックは「スポーツと文化」の融合を目指すものでした。かつては作曲部門で日本の「山田耕筰」さんなども参加された記録も残っています。

ただ残念ながら現代では、「スポーツ・スポーツ」です。

確かにスポーツは現代のメディア時代に合うと思います。

肉体の限界に挑む姿も素晴らしい、しかしオリンピックはキン肉マンたちだけのものなの
でしょうか？

例え体が不自由でも、魂の素晴らしさ、感動的なピアノ演奏で、生きていることをアッ
ピールできるステージがあってもいいではないでしょうか。それがまたチャンスの平等と
いうものではありませんか？

私は 「第2回ピアノパラリンピック in バンクーバー大会」で、北海道函館在住の、生ま
れて以来寝たきりの御嬢さんをコンピューターの会社インテルにお願いして、インターネ
ットを利用して会場のブリティッシュコロンビア大学の大きなスクリーンを使って演奏参加さ
せるのに成功しました。日本からやってきた技術者が3日かけて作業したおかげです。

又、完全にマヒしてしまった下半身でもあきらめず、ストローを使って特殊なペダル装置
を工夫し、見事な演奏をした金メダリストの山崎さんは、国際審査員の絶賛を浴び、のち
にシンガポール音大や タイの王立マヒドン大学に招待されました。

更に或るとき、一般国民の海外自由出入国不可能な国を説得し、ピアノパラリンピック特
別ビザをお願いし、第1回大阪アジア大会に選手を招へいしました。

視覚障害の彼が披露した「故郷」は素朴ながら感動的なものでした。関空で別れるときに
彼は目に涙をうかべて言いました。「私はもう2度とこんな素晴らしいチャンスはないでし
ょう。あなた方がプレゼントしてくれた航空券は、私たちの1年間の生活費以上のもので
す。本当に有難う。」そして次の年、長い監禁生活を強いられていた「アウン・サン・スー
チャーさん」は解放されました。

またピアノパラリンピックのデモンストレーションで、ニューヨークの国連に行った時の
ことです。

私の一番期待していた台北出身のリー君はステージに乗せてもらえませんでした。国と
して認めてないのが理由でした。

2日後にカーネギーホールで彼の演奏が決まった時、彼の演奏は午後にもかかわらず朝
から在米の台湾の人びとが入口に並びました。そして彼は堂々とショパンの3番のソナタ
を弾いてのけました。彼は発達障害ですが、よく歌えるのです。

一昨年のウイーン大会はそれはそれは豪華なものでした。

最初はウイーン市の対応は意外なものでした。「ココは世界最高の芸術家が目指すところだ。

名も知れない障害者の運動には興味はない」とのこと。

困りましたが、私は今までのバンクーバーや国連、カーネギーホールでの成功をベースに、日本の外務省を通じてウィーン市に掛け合っていました。

その結果ウィーン市議会議長の名義で招聘が決まり、開会セレモニーは19世紀に建てられた宮殿のような市庁舎のレセプションルームで大ダイナーパーティーの乾杯から始まりました。

会場になった「ミノリテン教会」は有名な「シュテファン教会」よりも古く、由緒ある教会大聖堂でした。

総大理石造りの礼拝堂の高い天井から天使が舞い降りてくるような皆の厳かなピアノの音に驚きました。

勿論ウィーンを代表するピアノ・ベーゼンドルファーの最高の響きもあつてのことでしょう。まるでレコードの演奏を聴いているような皆の素晴らしい演奏でした。私はこのような最高のものをみんなの為にプレゼントしたいのです。

此のときは世界中にネットワークを持っているオーストリーの有名な補聴器メーカー、メトエル社の支援もあって、なんと25ヶ国からの申し込みがありました。ビザの関係や諸事情により最終的には19か国に落ち着きましたが、トルコ、ウクライナ、ルーマニア、特にエジプトからは、政情不安の為に現地の軍や、日本大使館に特にサポートをお願いして最善の準備をしました。

こういう時に私は世界中がいかにか日本という国を信頼しているかを実感として感じます。名誉なことだと思います。この運動はやはり日本だからできることです。

2020年~2021年は東京オリンピックの年で、すでに様々なところで計画や思惑も動き出しています。

私は、東京都によるアイデア募集に「パラリンピックの開会式、あるいは閉会式のプログラムに100台のピアノによるデモンストレーション」を提案しました。そして演奏するのは100か国から選ばれたハンディピアニスト達です。

もちろんこれは一つのアイデアですが、オリンピックは世界40億の人々が見ます。

そしてスクリーンに映し出される様々な障害ピアニストを見て、自分たちにもチャンスがあることを一瞬にして分って頂けるでしょう。

巨額の設備投資金に絡む経済効果も納得できる。しかし古代オリンピックやギリシャの遺跡を見るとよくわかるように、後世に残る文化や品格の高さも考慮していただきたいと思います。

此のたび、この7月21日~22日の2日間、少し規模は小さいけれども、およそ10ヶ国の参加者による[アジア・汎太平洋国際障害者ピアノフェスティバル in 東京 2015]を「東京文化会館」で開催します。

これは久々に日本で開催するものですが、私どものピアノパラリンピックの目指すものについて具体的に多くの方々に見て聞いてもらうために特別に開催するものです。

既に、アメリカ、メキシコ、コスタリカ、韓国、中国、台北、インドネシア、日本、それに、大震災にも拘わらず参加するネパール代表、が参加を表明しています。

この方々は 私たち委員会が東京オリンピックの芸術部門にエントリーするために懸命に運動をしていることを知って応援の為に駆け付けてくれるものです。

皆さんもよくご存知ように、スポーツでさえも、エントリーの為に大変な努力と熱意でアッピールしています。

その中で芸術プログラムで参入することは大変なことです。
まさにピアノパラリンピックの意味や熱意が問われることに成ります。

いままでの私たちの国際大会に参加したピアニストだけでも200人を超えます。
そしてこの情報を知って次回アメリカ大会に参加する準備を始めた国も増えてきています。
特筆すべきは、すでに台湾には私たちと同じ目的を持った立派な組織ができました。独自に自分たちで費用も支給されます。

私たちにできることはただ一つ、実際に私たちの演奏を聴いていただくことにつきます。
そこには私たちでなければ生まれない新しい感動「UNHEARD NOTES」があるからです。

今回の「アジア大会」での代表の方々の演奏が、私どものピアノパラリンピックへの願いを伝える大切な機会となりますし、会場の盛り上がりは何よりも大切なことは言うまでも有りません。

この運動を私たちが願い、支援していることをまさにオリンピック委員会の方々に理解していただく大切なチャンスでもあります。

日本がイニシアティブ（先導性）をとり、そのことで世界中の可能性を秘めた新しい友人

音楽家たちの門戸を開くことができるのです。

どうぞこのコンサートにお出かけください。そしてみんなでオリンピック参加をお願いします。

オリンピックは参加することに意義があるといわれます。

みんなの力で世界中の人々の幸せの為に 22日の上の東京文化会館に集まり、応援しましょう。私たちの願いを伝えましょう。

2015・6・10